

木崎さと子

いのちの 波に かがやく

are shorn
ste and worn

but here within our orchard close
the guerdon of our labour shows

女子パウロ会

いのちの波にかがやく

木崎さと子

女子パウロ会

<著者>

木崎さと子(きざき さとこ)

1939年、旧満州新京市に生まれる。東京女子大学短期大学部英文科卒業。結婚後1962年から79年まで夫の勤務地フランス、アメリカに滞在。80年、『裸足』で第51回文学界新人賞受賞。85年、『青桐』で第92回芥川賞受賞。88年、『沈める寺』で芸術選奨文部大臣新人賞受賞。その他、『波 ハーフ・ウェイ……』『山賊の墓』『幸福の谷』『跡なき庭に』など、話題作多数。またエッセイには『美しい出会い』ほか。

いのちの波にかがやく

*

著者／木崎さと子

発行所／女子パウロ会

代表者／三嶋邇子

〒107 東京都港区赤坂8-12-42

Tel.(03)3479-3943 Fax.(03)3479-5197

印刷所／図書印刷株式会社

初版／1991年10月1日

ISBN4-7896-0362-8 C0095 NDC 914

©Satoko Kizaki 1991 Printed in Japan

もくじ

第一部 いのちの波にかがやく

1 身ごもり、子を産む

5 シモーネ・マルティニー
「受胎告知」

2 母の母なるひと

15 レオナルド・ダ・ヴィンチ
「聖アンナと聖母子」

3 わがこころのよくて ころさぬにはあらず

25 ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノ
「聖家族のエジプト避難」

4 自分の庭をたがやす

35 ラファエロ・サンチヨ
「美しい女庭師」

5 光あれ

45 フラ・ペ아트・アンジェリコ
「聖母戴冠」

6 愛が深まるときの不思議

57 ドメニコ・ギルランダイオ
「マリアの誕生」

7 母なる乙女

67 アレッソ・バルドヴィネッティ
「聖母子像」

8 死者と生者を支えるもの

79 ロレンツォ・ロット
「ピエタ」

9 清しこの夜

91 ハンス・メムリンク
「三賢者の礼拝」

第2部 生まれつつ生む生命を求めて

101

1 新しさと繰り返し

101

2 誠実ということ

111

3 他人の目

121

4 あくまで粘りづよく……

5 開かれた母性

6 お父さんたちの“冒険”

7 たとえ“資格”がなくても……

8 内なる《自然》を求めて

9 通りすがりの問い、本質的な問い

10 《救済》としての結婚

11 天国を想う力

12 人生を引き受ける根拠

あとがき

131

141

151

161

171

181

191

201

211

220

装丁・戸田ヒロコ

第1部
いのちの波にかがやく

1

身ごもり、子を産む



Simone Martini
受胎告知

……うら若いひとりの乙女が、静かに本を読んでいた。

そこに天使が舞い下りてきて、「めでたし……」となるのが、数々の名画に描かれた〈受胎告知〉の場面です。

天使が訪れたとき、マリアさまは何をしていらしたのでしょうか。

ほぼすべてのルネサンスの名画は、本、すなわち聖書を読んでいた、と答えているようです。

でも、もつと古くの、東方教会に流布した伝説では、糸を紡いでいた、という説があり、そこから糸ぐるまを聖母の表象に使っている絵もあります。

そのほか時代が進むと、夜ふけにひとりで祈っている画面も現れるようになります。

本当のところは、むろん分かりませんが、「糸を紡いでいた」という説は素敵だと思います。

私自身は糸を紡いだことはありませんが、それは単調な手仕事の繰り返しでしょう。

家事には単純な手仕事が多いけれど、そのなかで、家族の身をくるむ布に関する仕事は、縫い物であれ編み物であれ、心和むものです。

料理もむろん楽しいことですが、これは手順が結構いろいろあって、気忙しいことが多い。その点編み物など手を動かしているだけで、気持ちはしずまり、穏やかな反復のなかに、いつしか深い思索をたどっていることがあるものです。

ここに思索というのは、テーマを決めて論理的に階段を上っていくような系統だったものではなく、かといって、放恣^{ほうし}な気ままな空想でもありません。たとえば表現されなくとも、ことばに通ずるような生の深い実感とその確認、つまり内省です。

ヨーロッパ社会で文化がすみ、上流の娘たちは読み書きもできるようになると、聖処女が田舎娘みたいに糸を紡いでいたのでは、ということになり、読書をしていた、と「格上げ」になったのでしょうか。

糸を紡ぐより本を読むほうが高級だなどと、私は思いませんが、たしかに貴族の館のなかでお姫さまのような服装をしたマリアが糸を紡ぐのは、かえってわざとらしい。

大切なのは本は本でも、ミステリーなどのように筋を追って夢中になって読むものでは

なく、そこに書かれた一行二行の文章を、心の奥深くで反芻して、思いを深めるような本だったということです。

*

伝えられるように、マリアがかしい乙女であったのなら、聖書に書かれていることは一通りは知っていたでしょう。今のように、テレビや新聞に耳目を忙しくさせる時代ではなく、読むものは限られていたのですから。

文章としてはすでに知っているそのことを、マリアは、自分の実感とひきあわせつつ、確認していた……でしょう、たぶん。かしい娘なら、どんな高級な知識も自分の生とかかわらないかぎり、意味をもたない、と思っていたでしょうから。

イザヤ書の第七章第十四節を読んでいた、と念が入る説もあります。「見よ、乙女が身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる」

……分らない、とマリアは思わなかったでしょうか。しかしたぶんマリアは、婚約者をもつ身として、やがて「身ごもって子を産む」であろうことは、自らのうちに深く実感したかもしれません。

聖書を読んで、私など愚鈍なせい、分らないことだらけです。解説書とひきあわせれば一応の知識としては理解できても、そんなことでは分かったことにならないでしょう。少しでも実感できるものを手がかりにしていると、何かにつけて同じ箇所ばかり思い浮かべてしまいます。それでも度重なるうちには思いも深まり、ときに、はっとするような発見があつたりします。

そういう「発見」を啓示と呼ぶのはおおげさなかもしれませんが、まして、〈受胎告知〉のような啓示中の啓示、奇跡中の奇跡について、こんな人間的な思いを敷衍するのは瀆聖^{とくせい}かもしれないが、しかし、平凡な女が平凡な妊娠をするにしても、その受胎には聖母による御子の受胎と重ねられる神秘が充分にあると思うのです。

マリアが「身ごもり、子を産む」ということについて、たぶん人間として極限まで思いを深めたので、そこに奇跡が起きた……、と言つても言いすぎではない、とすくなくとも、数々の名画を見ていると思わされます。ルネサンス以降の画家たちは、そういう人間の条件のなかでの聖なる瞬間をとらえよう、と心をつくし、筆をつくしています。

*

シモーネ・マルティニは十四世紀のシエナ派の画家ですが、この〈受胎告知〉は現代の私たちが見てもよく納得のゆく心理的な画面となっています。

ここでもマリアは、静かに聖書を読んでいたのです。突然の天使の訪れにおどろいて、急いで閉じたページに指がはさまっています。そこはイザヤ書の例の箇所でしょう。

大天使ガブリエルは翼を広げ、マントをひるがえして、光りかがやきつつ近づくと「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたとともにおられます」

「この言葉にマリアはひどく胸騒ぎがして、この挨拶はなんのことであろうか、と思ひめぐらしていた」

画面の中央には、聖処女のアトリビュート（属性としての持ち物）として白百合が活けてあり、天使は自らのアトリビュートとしてオリーブの小枝を手にもち、頭にもオリーブの冠を被っています。画面にみなぎる黄金の光と衣の白さを映して、天使の顔はするどい気品に満ち、その唇からほとばしりでる「聖告」は一途にマリアに向かっています。

それを受けるマリアは、反射的に青いマントで胸元を覆い、身をすくませて恐れをあら

わしています。眉を少し寄せて目を伏せ、小さい唇はかるくゆがんで、もうちょっとで泣きだしでもしそうに、思い惑っています。

マリアの身体の微妙な曲線と天使のひるがえるマントが対応し、その間をまっすぐになく天使の視線と「聖告」の緊張した直線が、画面を立体的に構成しています。

「見よ、あなたは身ごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。彼は大きな者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう」という天使のお告げに、マリアは大いに戸惑って反問します。でも結局、「私は主のはしのためです。お言葉どおりこの身になりますように」と強い信仰による受諾を示すのです。

〈受胎告知〉の画といっても、天使の訪れからマリアの受諾までのどの瞬間をとらえて描くかは画家によってさまざまで、それによってその画家の聖処女の解釈が知られるようです。

たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチの場合、いかにも人体運動の解析の大家らしく、ダイナミズムに満ちた天使の訪れを、マリアは手を挙げ、權威をもって堂々とうけとめています。またフラ・アンジェリコのよく知られた作品では、穏やかなやさしげな天使に対して、聖処女もつつましく胸に手を組んで、静かな謙遜に満ちた受容をあらわしています。

ともあれこの瞬間に、キリスト教の歴史は幕をきって落としました。ひとりの少女の、深い思いと決断に満ちた受諾が、イエスの生誕の前に、あったのです。

*

マリアというひとりの乙女の胎内から、肉体をもつ有限な存在として生まれ、人間の条件のなかに死んだ神の子は、復活によって永遠の、時間を超えた存在として私たちとともにある。……そう、キリスト教は教えています。

北半球では、三月四月が万物蘇る春であり、キリスト教が伝来する以前から、どの国でも、春の到来を祝う祭りはあったにちがいありません。

個体としての生きものは年々歳々、寿命が尽きれば死んでゆき、同じ個体が再び地上に現れることはないけれども、春ごとに私たちは同じ「へいのち」が蘇った、と感じます。個体を超えて「へいのち」が続いている、と感じるのです。

その感じに、キリスト教は、人間の生死をひとつに貫くものとして、「永遠」という根拠を与えたのです。

救世主、という概念がなじみにくい日本人にも、私たちひとりずつの生命の意味をかぎ

りなく保証する人、を人類が必要としているという考えは、なじみやすいのではないでしょう。とりわけ、個々の生命の意味が実感しにくくなり、人間がどんどん物質化しているなどとさえ言われる現代では……。

*

カトリック教会では、去年（一九八七年）の六月七日聖霊降臨の祭日から、今年（一九八八年）の八月十五日「聖母被昇天」の日までを、「マリア年」として、キリスト誕生二千年である二十一世紀にむかう人類の歩みのうえに、聖母の御加護を特別にお願いしています。

この機会に私たちも、主婦、会社員、教師などそれぞれの立場のなかで、またクリスチャンであるかないかを問わず、「マリア」性とは、自分にとつて何なのか、改めて思いを深めたいものです。

母が子を産み育てる行為は、最も純粹な無償の愛の表現だ、という見方が一方にあれば、もう一方には、それは本能的な自我の拡張にすぎない、という見方もあります。

母と子の関係だけではなく、人間が他者とかかわるとき、そのかわり方は、この両極

端の間を揺れ動いているようです。

母子の関係がよく例に上るのは、その関係の「のっぴきならなさ」がはっきりしているからにすぎないでしょう。本当は私たちひとりずつが、同じの「のっぴきならない関係で、他人と結ばれているはずなのです。

そのことを知ること、そのことについて思い惑い、反問し、苦しみ、祈り、そして信頼をもって受諾すること……、それが私たちひとりずつに与えられる「受胎告知」なのではないでしょうか。

その「他人」とはだれなのか。人類すべて、であると同時に、いろいろな顔をした、私たち一人ひとりが毎日出会う特定の、あの人、この人、でしょう。

そう思えば、「受胎告知」は日々、だれのうえにも起き得ることなのかもしれません。